

「満洲国」の移民政策批判としての民俗展示場「北満の農家」について

大出尚子(筑波大学大学院人文社会科学研究所)

本報告は、「満洲国」国立中央博物館民俗展示場(以下「民俗展示場」と略記)の漢族農家の模造建築「北満の農家」の建設までを、建設に影響を与えた「満洲国」の移民政策の実態と合わせて考察し、その関連性を明らかにするものである。

民俗展示場は、1939年1月1日に官制施行した国立中央博物館新京本館の人文社会科学部門を担う施設として、官制施行後に着工された。建設の目的は、「満洲国」の先住諸民族の「民俗を縮図的に観る」場として、彼ら固有の生活様式を展示することであった。建設初期には、少数民族を含む諸民族の模造住居の建設を予定していたが、敗戦までに唯一完成したのが、「北満の農家」である。

犬塚康博氏は、「日本人移民の住宅形態モデルとして設けられた」と、「北満の農家」を論じるが、必ずしも実証をともなったものではない。博物館建設に向けて動き出した1939年前後の移民政策、特に日本人移民の住宅建設事情を考察したうえで、博物館の企画・運営者であり該館副館長・藤山一雄(1889-1975)が著述をとおして表明した移民政策批判と比較し、犬塚説の妥当性を確認する必要がある。

さらに、藤山が、「北満の農家」を漢族の代表的家屋として選定し、移築・復元して展示場にしようと思いついた経緯を考察し、民俗展示場構想に直接的影響を与えた満鉄開拓科学研究所との関連性を解明する必要がある。

以上の検討から、民俗展示場における採暖方法展示が、中国東北地方に渡った日本人にとって、日常生活に関わる最大の懸案事項であった住居の問題が取りざたされていた「満洲国」内の事情に鑑み企画されたものであり、民俗展示場が日本人移民に対する生活啓蒙の場として構想されたものだったことが明らかとなった。

また、民俗展示場構想の源泉には、暉峻義等(1889-1966)率いる満鉄開拓科学研究所の調査研究活動が存在しており、副館長・藤山は、「北満の農家」建設過程で、自らの理想とする「生活啓蒙」に学術的根拠を得て、博物館活動のなかでその理想を実践したことが明らかとなった。満鉄開拓科学研究所は、先住諸民族の生活形態の実態調査を行っていたが、博物館職員より先行して漢族の北満の風土に即した生活様式に注目し、家屋構造の調査を実施していたのである。